《カチャンカチャ……きゅっきゅっ》
（食器を洗う音）

ノラ
「ふん、ふん、ふん、ふーん♪」

食事はつつがなく終わり、少女は食器を洗い始める。
貴方は何とも言えぬ奇妙な気持ちになりながらその背中を見つめていたが、ついに我慢出来なくなり、再び彼女に問いかけた。

【なんで、帰らなかったんだ？　金は十分渡したと思うが？
……金目の物をついでに盗んでいこうってんなら、部屋を片付けていて、禄な物は置いていないと分かったはずだが？】
と、貴方が言葉を投げると、食器を洗っていた少女の動きがぴたりと止まった。
暫く固まったように動きを止めていたが、食器を洗うためか背を向けたまま、また動き出す。

ノラ
「なんだよ、部屋を綺麗にして飯まで作ってやってたってのにご挨拶じゃないか？
……オレが部屋にいちゃ悪いってのかよ？」

【悪い……というより、訳が分からない。

言っておくが、お前にスリをされたのを忘れた訳じゃないんだぞ？
場合によっちゃ、詰め所に引っ立てられて、放り込まれたって文句言えない立場だって分かってるのか？】
と、目的が見えない少女の行動につい口調を硬くしながら貴方が問う
と、少女の動きが再び止まる。

ノラ
「……そんなの、わかってるよ」

《かちゃん……》
（食器を置く音）

かちゃり、と洗っていた食器を置く音が部屋に響いた。
少女がゆっくりと、振り返る。
そして濡れた手を服の裾で拭いながら、俯き気味に貴方に向き合った。
裾を掴む手には力が入っているようで、ぎゅっと……握られた端が歪んでいる。

《ぎゅ……》
（服を握る音）

ノラ
「……帰れって言われたって、帰る場所なんかねぇんだよ、オレ。
家なんか、家なんてもん……オレにはもう、何処にもねぇんだ。

そうじゃなけりゃ、最初からあんたの……おっさんの財布狙って、スリなんかしてねぇよ」

何処か不貞腐れる――いや。
整理のつかない気持ちに苛立ち、自身を嘲笑うかのように、少女が語る。

【親がいないのか？　それとも、孤児院から逃げてでも来たのか？】
問い返す貴方に、少女は無言で答えない。
ただ、唇を強く噛み、俯いている。

ノラ
「……っ」

【……帰る場所はなければ、行く宛もないのか？
だから家の掃除に、料理まで作って帰りを待っていたって言うのか？
……冒険者なんて荒くれ者の仕事だ。そんな奴の家に居座ろうとするのが、どんな事か理解してるのか？　機嫌を損ねでもすりゃ、身の危険がありそうな事ぐらい分かるだろう？】
あまりに無用心な少女の考えに、つい貴方の口調も荒くなる。
少女はその言葉に、裾を更に強く握りしめる。
そして、ゆっくりと俯きながらも口を開いた。

ノラ

「……スリをしようとした馬鹿な女を拾って、飯に金まで恵んでくれようとした、アンタだからだよ。
無茶なのは分かってるけど……頼み込んだら、置いてくれるんじゃねぇかって、そう思って……」

少女は顔を上げずに答えた。
随分と自分に都合のいい事を言っているという自覚はあるのだろう。
目線を合わせようと何度か顔を上げようとするが、その度に気まずさからか顔が伏せてしまう。

少女の様子に、彼女と会ってから何度目になるか分からぬため息が、大きく貴方の口から出てしまう。
【……出てけって言ったら、どうするつもりなんだ？】
と、つい強い口調で問い詰めるように聞いてしまう、貴方。

ノラ
「……分かんねぇ。オレ、ほんとに他に何処に行っていいか、全然……思いつかねぇんだ。
知り合いとか、そういう相手も頼れねぇし……何処にも、行く場所なんかなくて……」

口に嵌った大きな石の塊を少しずつ吐き出すかのように、ぽつりぽつりといった様子で少女が言葉を続ける。
貴方は、思っていたよりもずっと面倒な事になったと、思わず大きなた

め息をまた一つ漏らした。
その息に最後の希望が消えるとでも思ったのか、途端少女はびくりと肩を震わせて、必死に顔を上げる。

ノラ
「っっ……！！　なぁ、たのむっ！　たのむよ！？
オレ、もうどうしていいか分かんねぇんだよぉ！！
こうして、部屋の掃除や飯を作るぐらいの事は出来るっ！　家事はそれなりにゃ出来ると思ってるんだ！
あんたの人の良さに付け込んで、好き勝手言ってる自覚はあるけど、出来る事ならオレ……何でもするから！！
もう、オレ……本当に、どうしたらいいか、分かんねぇんだ……っ！！」

《どんっ》
（少女が土下座する音）

がたんと、膝を地面につけ、頭を擦り付けるようにして少女が必死に懇願する。
食事の時に明るく振舞っていたのは、彼女なりの痩せ我慢だったのかもしれない。
数日手入れもされていなかったであろうボサボサとした髪が床を何度も擦りていく中、少女は必死に貴方に縋り続ける。

ノラ
「本当に、出来そうな事なら何でも……オレ、何でもするから！！
だから、お願いだっ！　オレを、ここに……っ」

【何でも？　……へぇ、じゃあ。
お前で、楽しませて欲しいって言ったら、そうしてくれるのか？】
少女の後先も考えない様子で必死に頼み込む姿に、ついそんな言葉が口から漏れ出ていった。
男の部屋にいさせてくれと女が頼むには余りに無用心な言葉であったために、試すような気持ちが湧いていたのかもしれない。

ノラ
「なっ！？　……っっ！！？？」

瞬間、少女の顔が跳ね上がる。
明らかに怯えの色が混ざり、食事をして少しはマシになっていたはずの顔が完全に青ざめている。

ノラ
「あっ……ぅ、……ぅ、それ……は、……そ、の」

カタカタと、小刻みに震える少女の体。
そんな要求をされるとは夢にも思っていなかったのか、それともそう要求されるのを避けたくて片付けや料理などが出来るとアピールしていた

のだろうか。
少女の手がまた服の裾を強く掴む。先程までよりもより強く、逡巡の強さがそのまま握る力になっているかのように、服が千切れそうな程、強く。

ノラ
「あ……ぅ、や、だ……それは、イヤだ……け、ど。
あ、あ……あ、あ、あん、た……が、の……のぞ……む、なら」

震えがそのまま声になってしまったように搾り出された小さな――いや、今まさに絞め殺されている最中とでもいうかのような、言葉にもなっていないような震えた声が少女の口から絞り出されていく。
顔色はますます蒼白くなり、堪えがたいものを必死に飲み込もうとでもするように、何度もえづきながらも少女は更に言葉を続けようとする。

ノラ
「お、オレ……オレ……っ！」

【……ったくもう、分かった、分かった！　冗談だ、冗談！
お前みたいなちんちくりんな身体を抱いた所で楽しくなんかるもんか！
そんな要求はしない！】
無茶を言われているのは貴方のはずなのに、少女を苛めてでもいるような気持ちにさせられてしまい、降参とばかりに彼女の言葉を止める、貴方。

ノラ
「は？　へ？　……じょう……だん？　……冗談！？
は、はは……、ハハハハ！
はぁ……ぁ、はぁぁぁぁ……ハハ……よか、ったぁ、はぁぁ……」

少女は余程思いつめていたのか。冗談という言葉に反応するのも遅れ、ようやく理解が出来ると、顔中に安堵の色を広げながら、深いため息を吐き出す。

【まったく、何かの縁なんて思うもんじゃないな、こんな面倒な事になるとは思わなかった。
言っておくが、タダじゃないからな？自分で言った通り、掃除やら飯やら……まぁ、その辺のやれそうな事はきっちりやって貰う。
怠けるようだったら、遠慮なく放り出すからそのつもりでいろよ？】
と、渋々といった様子で貴方は少女の居候を認める言葉を告げた。
その言葉を聞いて、彼女の顔がパっと明るくなっていく。

ノラ
「あ……あぁ！それは、勿論！！
は、はは……あぁ、本当に良かった……。ようやく……ようやくほっと出来たよ。
へへ……、へへへ♪
ありがとう……ありがとうな、おっさん！」

礼儀として仮にも住ませて貰うのなら、その『おっさん』呼びは止めろ、と貴方は声をかけようとした。
だが、あまりに……少女の本当に安心したような――息絶える寸前に、救いの手を差し伸べてでも貰えたような涙ぐんだ安堵の顔を見てしまい、結局……それを言葉に出来なかった。

ノラ
「へへ、へへへ……♪
ちゃんと、仕事はするからよ！　任せてくれよな、おっさん♪
へへ……ぐすっ」

【……まぁ、無理せずやってくれ】
と、妙な事に……とことん妙な事になってしまったと軽い頭痛のような疲労感を覚えながら。
貴方は、目の前で嬉しそうに笑い続ける少女の姿に、本日最後の大きなため息をまた一つ溢してしまう。
そしてふと、一緒に暮らすならば一つだけ聞かねばならぬ事があると気付いた貴方は、少女にそれを聞く事にした。

つまり、【そういえば、名前は？】と。

ノラ
「へへへ♪　……へ？

あ、オレの名前か？　あ、えっと……どうしようかな。
いや、あー……その、そうだな？　オレは、そう……野良猫みてぇなもんで……野良……うん、ノラ！
オレの事は、ノラって呼んでくれよ！
へへ、宜しくな……おっさんっ♪」